第１０回教育懇談会から事務局へ提起された課題
に対する取組・今後の方向または見解

１（幼小接続に関して）
　幼児と児童の交流及び幼稚園教員と小学校教員が実際に相手方の現場で指導の経験を持つなどの指導者の相互体験の導入は必要なことであり、それを県内でどの程度行われているかを実態把握した上で、県内で取り組まれていくように進めてはどうか。

【学校教育課】

　県内幼稚園担当指導主事会での聞き取り調査では、県内のほとんどすべての近隣の幼稚園・小学校間で、次のような形で交流が行われている。

①　子どもについての情報交換、指導についての合同研修等を通した教員の交流
②　小学校教員が幼稚園に出かけ「絵本の読み聞かせ」や「歌やゲーム」等の指導をする「出前保育・出前授業」の実施
③　幼稚園児の小学校生活科の授業への参加や音楽会、作品展等の行事への参加等の交流
④　幼稚園・小学校の立地条件を生かした施設の共用を通した交流
⑤　就学前幼児の小学校体験入学

　今後、幼稚園・小学校の効果的な連携の在り方について研究したいと考えている。

【教育研究所 】

　教育研究所では、初任者研修の中で、小・中・高・障害児教育諸学校の初任者が幼稚園を訪問し、実際に保育の中に参加したりして、保育の実際について研修している。また、夏期の初任者宿泊研修では、幼・小・中・高・障害児教育諸学校の教員が校種を超えて交流し、ともに研修する場を設定し、相互理解を深めている。

　さらに、本年度から夏期休業中に、小・中・障害児教育諸学校の初任者を保育所に２日間派遣し、保育実習を体験させている。

　こうした研修は、幼児教育が、人間形成の基礎づくりであることを共通理解することにより、幼・小の接続の在り方だけでなく、幼稚園・小学校を通しての育ちの過程の連続性を重視した教育づくりをめざすことにつながるものであると考える。

２（子育て（教育）支援ボランティアに関して）
　子育て（教育）支援をしていただける県内の有能なＯＢを早く組織化し、その地域の中で働いていただく工夫を早急に行ってもらいたい。

【学校教育課】

　幼稚園は、地域の「子育て支援センター」としての役割を果たすために、地域の方々に御協力・御支援をお願いしている。また、小学校や中学校でも、総合的な学習の時間等でゲストティーチャーとして参画していただくなど、地域の方々と連携しながら教育の充実を図っているところである。

　それらの取組のために、１５市町村では「人材バンク制度」を置いており、各学校、園でも、独自に、その教育活動に協力していただける方のリストを作成している。

【人権教育課】

　本年度から県単独事業として子ども人権学習支援事業を実施している。この事業では、「地域ふれあい講座」「子育て学習講座」及び「子どもの交流活動を促進する事業」等を行うことができる。そのなかでは、地域の産業に従事している人々、地域のさまざまな施設等で働いている人々など、地域の人材が講師として多数活躍いただいている。

　ある市では、市内外のさまざまなボランティア団体、退職教職員の会、地域で活動している芸能集団、団体職員等が各講座で中心的な指導者となっている。

　また、別の市では、施設から通う子ども達の自尊感情の醸成やさまざまな教育上の課題の解決をめざして、学校、施設、地域のボランティアが協働して取組を展開している。

【教育研究所】

教育研究所の家庭教育を支援するボランティアに関する事業では、ボランティアとして活動する「家庭教育支援講師」を編成するとともに、ボランティア活動ができる人材養成を目的とした「子育てサポーター養成講座」を行っている。

家庭教育支援講師は、家庭教育学級や各学校、また、企業に出向いて行う「子育て企業フォーラム」で講演をするとともに相談にも応じている。

子育てサポーター養成講座は、各市町村の教育委員会、福祉課、健康対策課が推薦する県民を対象に実施している。この講座修了者は、奈良県子育てサポーターとして名簿に登載し、各市町村に報告するとともに活用を促している。

なお、平成１４年度より「子育てサポーター養成講座」は、県福祉部子ども家庭課が実施している「地域子育てサポートクラブ育成事業」と連携し、人材育成を教育研究所で、地域で活動できる組織づくりを子ども家庭課が担うという役割分担を明確にして行っている。

今後、「子育てサポーター養成講座」については、県及び市町村との連携を深めるとともに、退職校園長会等とも連携し、人材養成に努める。

３（研究指定校における研究の進め方に関して）

教育研究所と教育大がそれぞれの研究校に関わりその結果を報告することが、改革のスピードを速める。お互いによいところを取り合って頑張ってほしい。

【学校教育課】

これまで、研究指定校の研究については、各学校の主体性を尊重する立場で、当該校から要請があった場合に、学校教育課や研究所の指導主事が訪問して指導してきた。

御提起いただいたように、本年度スタートさせた「学力向上フロンティア事業」では、、「奈良県学力向上推進協議会」を組織し、１１の指定校の研究をサポートする形をとっている。その委員には、奈良教育大学、奈良女子大学の教授・助教授及び学校教育課、教育研究所の指導主事並びに実践的な教員が加わっている。これらの委員は、各学校の研究に対して指導・助言するとともに、推進協議会の開催時には、研究の方向性を討議し、効果をあげつつある。

今後、このような地域の大学、教育研究所と連携を図った研究指定校の取組を進めていきたい。

【教育研究所】

教育研究所においては、平成７・８年度の２年間、「調査研究協力校」を募集して調査研究を行った。それぞれ１年間の研究であったが、学習意欲の向上を図るための機器利用の在り方、ティームティーチングによる諸課題の抽出など充実した研究であった。

教育研究所がいくつかの学校を研究校として指定するほか、研究所附属の学校をつくるなどして、学校（児童生徒）と直接かかわりながら研究・検証を進めていくことは、これからの奈良県教育行政を支える基礎資料を蓄積するものとして大変重要なことであると考えている。

また、このような研究を充実させるためには、奈良教育大とのより一層の連携が不可欠であると考えている。現在、奈良教育大学教育実践総合センターとは、教育研究所が協定を結び、研修講座のほか、いじめ、不登校等の教育課題解決のための事業において連携している。今後、調査研究部門においても奈良教育大学との連携を一層進めることが重要であると考えている。このような連携を進めることによって、教育研究所が大学の教育研究と各学校の教育実践とを結びつける機関としての役割を担い、各学校の教員の資質向上が一層図られると考える。

４（総合的な学習に関して）

総合学習についていろいろ調べておられる研究所から、県内で際立った成果をあげていると思われる事例の幾つかを報告してほしい。

【学校教育課】

県教育委員会指定の研究学校で総合的な学習の時間をテーマとして取り組んでいるのは、これまでのところ８校だけである。これらの学校は、研究発表会や報告書でその成果を県内各校に周知しているが、その中の一校が、今回、総合的な学習の時間の評価を中心に研究成果をまとめ、出版物として刊行して全国的に注目を受けているところである。

【人権教育課】

平成１１・１２年度人権教育研究指定校　香芝市立真美ヶ丘西小学校

①　地域と密着した学習

・　地域の遊び場しらべ、社会福祉施設の訪問、米作りのための田畑借用、地域施設の活用（店舗、郷土館、神社等）等

・　地域老人会との交流、高齢者のゲストティーチャーとしての招聘、地域で働く人々のゲストティーチャーとしての招聘

・　保護者の積極的協力（学習時間の安全確保、講師やゲストティーチャーの紹介）

・　学校が目指す子ども像や教育理念の地域への浸透

②　教職員の発想の転換や意識の変化

・　学校が地域の中に存在していることの再確認、地域の人々（多用な年齢や職種の人々）との人間関係づくりの難しさとそのことの大切さを体験

・　地域に潜む学習材の探究と発見（教材研究の目を地域に・・・）

・　家庭や地域との交流のなかで、教師がもつ子ども像をより現実的なものとする事ができた

③　学校の時間割や校時の工夫

・　職員朝礼の見直し（必要事項は連絡黒板で、出来るだけ子どもと過ごす時間の確保）

・　子どもの自主的活動の時間の確保の工夫（命かがやき集会）

平成１１・１２年度人権教育研究指定校　　新庄町立忍海小学校

①　地域の学習材の活用

・　地域の自然探究　　・　地域の産業（菊づくり、酪農、米作り）

・　高齢者学級等との交流　　・　地域の農協の協力

②　児童の探究・情報発信能力の向上

・　児童の主体的な調査活動を学習の中心とし、まとめの活動を情報交流や質疑応答を中心に展開したため、児童一人一人の情報収集能力、コミュニケーション能力の飛躍的な向上を図ることができた。

③　地域・保護者の協力

・　児童、職員、保護者の三者が協力して校内に水田を作った。子ども達は、保護者とともに活動するなかで、労働の苦しさと大切さ、保護者の偉大さを体感した。また、共同作業を通じて職員と保護者の信頼関係が強まった。

・　大和肉鶏をひよこから飼育し、成鶏まで育てた。その過程で保護者等から多大な協力を得た。また、育てた鶏を食肉にするかどうかを児童に論議させる中で、「いのち」の問題、人間が生きることの意味等を考えさせることができた。その論議は保護者を交えての展開となり、肉にする過程は、保護者の協力を得て行うことができた。

【教育研究所】

総合的な学習の時間の取組を評価する際に重要な観点は、主に次の４つである。

①「総合的な学習の時間」で育てたい資質・能力（問題発見力、自己判断力、計画力、コミュニケーション力等）がきちんと位置付けられ、児童生徒の発達段階に沿って系統立てられていること。

②単発的な指導ではなく、単元構想がしっかりしていること。

③小学校では第３学年からの４年間、中学校、高等学校では３年間を見通した活動計画が立てられていること。

④評価の観点が示されており、それが学習指導要領に示されたねらいに沿ったものであること。

これらの観点から、際だった成果を上げていると思われる事例を下記に報告する。

奈良市立佐保小学校

大テーマ「佐保に生きる」

○育てたい資質・能力（問題発見力・自己判断力・計画力・行動力・コミュニケーション力・表現力・自己評価力・実践力）が、児童の発達段階に沿って系統立てられている。

○４年間を見通した活動計画が立てられている。

第３学年「佐保のふしぎ　発見！」

第４学年「人にやさしい佐保にしたい！」

第５学年「わたしたちの環境を守ろう－佐保からのＳＯＳを！－」

第６学年「ひろげよう　佐保ネット」
ひまわり「しらせよう！ひまわりじまん」

○「総合的な学習の時間」の活動と各教科・領域の活動がうまく関連付けられている。例えば、第５学年の「わたしたちの環境を守ろう」では、国語・理科・家庭・社会・特活の各学習活動と関連付けながら、佐保の自然、生活、環境を守り大切にしていこうという意欲を高めていくとともに、人が生きていくためにはどのような環境が望ましいか考え、追究し深めるような学習活動を組み立てている。

○活動計画の中に評価計画がきちんと位置付けられており、活動したことがきちんと評価されている。

西吉野村立白銀北小学校

「やまもも活動」
第３・４学年「ふるさとをもっと知ろう　～お祭り・行事を通して～」
第５・６学年「ふるさとから発信しよう　～北小自然博物館～」

○育てたい学ぶ力（課題を見つけ取り組む力・情報を集めつくる力、表現する力、学習を振り返り考える力）が系統立てられている。

○４年間を見通した活動計画が立てられている。
第３・４学年で、地域に伝わるお祭りや行事に参加したり、調べたり、表現したりする活動を通して、地域のよさを知るとともに、表現力を育てることを目標としている。それを受けて、第５・６学年では、地域の自然を調査し、発表・発信することを目標として、自然調査をし自然博物館を作り、世界へ発信する活動を行っている。

○活動計画の中に、評価計画がきちんと位置付けられている。

橿原市立畝傍中学校

大テーマ「環境教育」
環境教育という大テーマのもと、１０講座を開講している。

１　ワクワク・ドキドキ探究活動in飛鳥川	２　虫たちがいて、私たちがいる
３　森のめぐみ「衣」	４　森のめぐみ「食」
５　森のめぐみ「動物」	６　森のめぐみ「植物」
７　森は友だち「生態系とは」	８　森は友だち「ものづくり」
９　地球と話そう（地学の世界から）	10　地球と話そう（国際社会から）

○目標と評価の観点がうまく関連付けられている。
・自然と人間生活の、よりよい関係を形成するための課題を見つける。
・見つけた課題を分析し解決する取組方法を特定する。
・課題解決、改善、修正への方法を実践し検討する。

奈良市立三笠中学校

テーマ「自分で選ぶ『仕事』　～こんなことができたよ～」

○職場体験学習を特別活動・「総合的な学習の時間」・道徳の時間の３本立てで行っている。

○身に付けたい力がきちんと示されている。
・自分で判断する力
・自分の意見や考えを伝えることができる力
・心をこめた表現や丁寧な話し方ができる力
・違う考えの人とも一緒に働き成果を出せる力
・他の人の気持ちや考えなどに気付く力
・自分の個性や特徴を知り活かす力

○身近な人にインタビューをして仕事調べをし、発表会を行っている。そしてその後、公開講座「労働に学ぶ」（生徒は希望により講座を選択）を開講し、仕事（職業）への理解を深めさせている。
講師の方々（放送局、美容室、ホテル関係者　ほか１２名）

県立山辺高等学校

IS21（Integrated Study for 21st century）

○課題研究的な内容のもので、自分が興味・関心をもった課題を定め、自分で考え解決していく力を育成することをねらいとして設定されたものである。

○研究グループ

1 生涯スポーツの研究　2 英文の研究　3 ギネス記録の研究
4 節約レシピの研究　5 ペットボトルロケットの研究
6 人に身近な動物の研究　7 交通事故の研究
8 二輪車の研究　9 法律と裁判の研究
10 絵の描き方の研究　11 イギリスの文化の研究
12 ダイエットの研究　13 ファッションコーディネイトの研究
14 足ツボの研究　15 モータースポーツの研究
16 近代音楽の研究　17 運動ダイエット法の研究
18 保育の研究　19 臓器移植についての研究
20 絵画の研究　21 スポーツよもやま

○「自ら学ぶ」という自主性を大切にしている。
○発表の機会を多くし、より多くの人に評価してもらうことにより、よりよい研究となるようにしている。

5（道徳教育に関して）
昔の教えというものをきちんと学び直すことが必要で、奈良は春日大社の宮司さん、薬師寺の好胤先生、京都の石門心学の石田梅岩、四条畷の関西師友協会、等々、とてもよい先生方が周りにおられ、奈良発の道徳の教科書を作ってみてもよいのではないか。

【学校教育課】
御提起の趣旨に沿うものとしては、「小・中学校道徳教育用郷土資料」を作成している。
本資料は、郷土の先人の生き方や考え方を学ぶことを通して、奈良という郷土に対する理解や愛着を深め、ひいては子どもたちの道徳性を養うものとして各学校で活用されている。
内容としては、薬師寺西塔を現代に蘇らせた宮大工の棟梁、西岡常一さんや、水平者創立に尽力された西光万吉さんなど１５人の方々を取り上げており、これまで、いくつもの出版社の道徳副読本に転載され、全国の子どもたちにも読まれている。

【人権教育課】
奈良県では市町村と協力して県内の全ての児童生徒に人権教育資料「なかま」を配布している。「なかま」は、県内の教職員が児童生徒の実態に基づいて教材を精選し、研究授業等を経て、編集されているものであり、「いのち」に関する教材、「さまざまな人権問題」に関する教材、「人権を尊重する技能や態度の育成」に関する教材等が児童生徒の発達段階に応じて配列されている。
各学校では、この「なかま」を児童生徒の実態に合わせて、道徳をはじめ各教科の学習で活用している。道徳に関しては、自他を尊重する心の育成と、とりわけ「だれに対しても差別することや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める」という指導内容の項目に関わり、その実践が進められている。

【教育研究所】
県教育委員会では、これまでから本県独自の道徳教材の開発に取り組んできた。例えば、昭和６１年には、『道徳郷土資料』を刊行し、森本六爾、野長瀬正夫、富本憲吉、棚田嘉十郎、西岡常一、西光万吉、谷三山、辻本史邑らの話を所収している。
また、平成11・12年度には、教育研究所で、奈良県独自の道徳学習教材『ひびき合う心（小学校高学年編）』と『響き合う心（中学校編）』を、平成12・13年度に『ひびき合う心』の小学校中学年編と低学年編を刊行し、県内の全学級に配布し、活用されている。（文部科学省委嘱事業）
それぞれの冊子に登場する人物は、ねらいに即した本県出身の次のような方々である。
○　生命の大切さについて語る県内の獣医師。
○　規則正しい生活の大切さを語る奈良県出身のＪリーガー楢崎選手。
○　自分の夢の実現に向けて頑張り、ついにそれを実現させた奈良県初の女性消防士。
一方、各学校における地域の人材を取り上げた道徳教材の開発を支援するため、本年度は、教育研究所で教員の自主的な研修として、「心に響く道徳教材をゲットしよう」セミナーを３日間開催する。その中で、教員の教材開発力や指導力を高め、道徳教育の充実に努めていきたいと考えている。